君はあの日のまま戻ってきた

武上 渓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君はあの日のまま戻ってきた

【Ｎコード】
Ｎ６３０８Ｄ

【作者名】
武上　渓

【あらすじ】
週刊誌記者竹山透４５才。多くのタレントを食い物にして、恐れられている彼は、３０年間捜し続けている女性がいた。３０年前「雨屋」と呼ばれる農作業小屋で、大好きだった清美ちゃんは忽然と姿を消した。３０年目の１２月２４日。二人の約束を込めたノートが、二つの世界に穴を開ける！。何でもない日常を失った二人が、それを奪い返し、本来の自分達を回復してゆく恋愛物語！。全１１話ついに連載開始！

ー前書き

献辞

２４時間　不具合とメンテナンスと不正操作に敢然と立ち向かう
管理者のウメさんに

今現在も前3作品に
毎日アクセスして下さる読者の皆さんに
感謝を込めて

かつて
作者の大好きな君だった
あゆみちゃんと
愛犬ミミちゃんに

本作品を捧げる

君はあの日のまま戻ってきた

ー前書き

前作の予告で切ないラブストーリーになると書きましたが、結果的にあんまり切なくなりませんでした。また竹山の視点で描きましたので、女性の方には感情移入しにくいかなと思ってます。もう少し竹山を悪い奴にするつもりでしたが、悪い奴を装っている優しくて頑固なキャラにしました。そうしないと、頼る人物のいない１５才の清美がどうやって生活するのか…という問題を解決できないからです。最初はヒドイ扱いをしつつ次第に…というのがセオリーなんですが、それも不自然かなと言った所です。３０年も捜し続けた彼女に冷たくする理由はないのも確かではあります。
本作品は多次元宇宙という仕掛けで３０年前と現在を結んでいます。登場人物は３０年前と現在のそれぞれ同じ人物が登場する訳ですが、犯人だけはただ一人で３０年前と現在を移動しています。この多次元宇宙の仕掛けについては、作中で登場人物が説明してますので、そちらの方で理解して頂きたい。
また、２話で主人公がウォークマンで小田和正さんの♪大好きな君にを聴くシーンがあります。
もし読者さんの方でこの歌を用意できるようであれば、聴けるよう

にスタンバイして読んでみて下さい。他には1話でネルソン　レンジのシティライツが流れ始めたとあるので、それも良ければ流してみて下さい。
さらに11話を読み終えるタイミングで、小田和正さんの♪たしかなこと　を流して頂くと、かなりいい感じになります。よろしければ、やってみて下さい。
途中訳が判らなくなっても、一気に読んじゃって下さい。仕掛けがどうなっているかは、後から考えてもらっても良いと思います。

お互いを想う気持ちが作りだす奇跡の物語です。
竹山（たけやま）　透（とおる）と共に、12月23日のバー“バタフライ　エフェクト”に　まずは御案内します。

2008年2月10日

武上渓

ー第1話プロローグ

ー第1話プロローグ

東京都内某所　バー“バタフライ　エフェクト”

竹山（たけやま）　透（とおる）４５才は、オールド　グランパという口当たりの良いウイスキーで時間を潰していた。
７人ほど座れるカウンター席の真後ろに入り口があり、従業員用の裏口がカウンターの中の左端にある。
Ｎｅｌｓｏｎ　ＲａｎｇｅのＣｉｔｙＬｉｇｈｔｓが流れ始めた。
バーテンダーは竹山以外に客が居ないためグラスを磨き始めている。
竹山の唇は、およそこの店の雰囲気に似合わない歌を口ずさんでいた。
「…大好きな君に　すぐ…」
小田和正の　大好きな君に…。バーテンダーの一色（いっしき）　登（のぼる）は、竹山が緊張した際にこの歌を口ずさむ事を知っていた。これから何かが起こるらしい。
腕時計をチラッと見る…２３時３０分。この火曜日の夜は、まったく商売にならない。この週刊誌の記者…あだ名は妄想のチクザン。
電車で相席に座った新人女性アイドルは、隣りに座ったイケメン大学生とめくるめく恋愛関係にされ、さらに三角関係で話は膨らみに膨らみ、この根拠のない記事はついに、この女性アイドル主演でテレビドラマ化された。イケメン大学生と三角関係にされた会社員は、出版社を訴えて勝訴したがドラマの差し止めは認められず、３０万

の賠償金を手にして引き下がった。
女性アイドルにとっては結果的に幸運をつかむ事になったが、妄想のチクザンによって芸能界を去らざるおえない芸能人や、記事によって被害を受けた人々は被害者同盟を結成しようという段階にまで来ていた。それに対抗すべく出版社は弁護士団を密かにつくるなど合法非合法両面で謀略を進めていた。それだけ竹山の妄想記事は週刊誌業界に巨額の利益をもたらしていた。彼が書かないと売り上げは半分になるだろうという予測が、竹山の存在を保証していた。そうした背景もあって、あらゆる芸能人は死に神より竹山を恐れて、彼が居たと噂される場所には近づきたがらなかった。このバーもそのひとつだったが、若いタレントの中にはそれを知らない者もいた。ドアがゆっくりと開いて、サングラスにスーツの背の高い男と黒のワンピースに大きな帽子をかぶった小柄の女性が入ってきた。
男はサングラスを外して店内と竹山の背中を見た。
サングラスの下から現れた顔は少年だった。タレント名鑑を見れば、今年彼が15才だという事がわかる。彼は同い年の彼女の背中に右手を添えて、テーブル席に促した。
竹山の後ろを通り過ぎながら、横顔をチラリと見て彼は動けなくなった。ワンピースの彼女がナニ？という顔で、彼の顔越しに見て同じように動けなくなった。
「お前らさ…その派手なかっこうなんとかしろよ。目立ってしょうがないだろ。」
二人とも血の気が引いているのは、見なくても竹山にはわかっていた。
「…なんか言えよ。男なら彼女の為に命乞いぐらいしろ。俺を殺してでも、大好きな彼女を守ってやれよ。そうしないと…俺みたいに一生後悔するぞ…。」
男は、いや少年はその言葉に自分を取り戻した。武道館を女の子で一杯にするビックスターは、竹山が自分達を救おうとしている意図をすばやく読み取った。

彼はバーの床に沈んだ。そして頭を床にこすりつけた。
「僕はどうなってもかまわない。エリだけは…エリだけは助けてください。」
エリと呼ばれた少女も全国ツアーをする歌姫だった。彼女も床に崩れた。
「…そんなこと…いわないで…わたしだってどうなってもかまわない。私は私は。好きな人と一緒に居られればいい。仕事やめてもいい。…もうやめよ。こんな事。太陽の下で、二人で居られる場所に行こ。」
竹山は、両方の目から溢れる涙をバーテンに隠す為に下を向いていた。声が涙声にならないように、竹山はしばらく沈黙した。それが二人の意志を固くしていった。
「竹山さん。僕は…。」
辞める。という言葉を…竹山はグラスをなぎはらってかき消した。グラスはカウンターを滑って、壁に激突するはずだった。しかし壁の手前で、一色がグラスをキャッチしていた。
「竹山さん。今夜は飲み過ぎです。もう一杯でラストオーダーにしましょう。」
竹山は冷たい声を取り戻した。
「…そうだな。もう終わりにするか。」
床の二人は息をのんだ。
「カウンターの向こうに裏口がある。彼女は歩けないだろうから背負っていってやれ。出たら、すぐ前のビルとビルの隙間を無理やり抜けろ。抜けたとこにタクシー乗り場がある。ラブホテルに逃げ込め。渋谷じゃねえぞ…都内の外に出ろ。金は有るか？。」
「竹山さんどうして…？。」
「お前の記事をもう入稿しちまってるんだよ。こんな純愛、他に書かれてみろ…終わっちまうだろうが。お前らは六本木のトリニティーブルーに現れるってガセ流しといた。頭にきた記者さん達が、ここに殺到してくるぞ。お前らがここに来る事は日本中の記者が知っ

てるんだよ。…少しは頭使えよ。学習してるヒマなんかねえぞ、アイドルには…。」
「あっ…ありがとうございます。」
「だから頭使えって言ってるだろう?。早く行け!。殴られねえと目が覚めねえか?。」
「はい。」
少年は立ち上がった。少女も気丈にも立ち上がった。
「歩ける?。」
「走れるよ。」
二人はもう明日に向かっているように見えた。
一色がカウンターの端を跳ね上げて、二人が通れるようにした。二人は竹山に一礼してカウンターを抜け裏口に飛び込んで行った。

裏口が閉まると、ドーンという音と共に表口のドアが激しく開いた。
「ミナミヤマさん。ドアを壊さないで頂けますか?。」
一色は何事も無かったかのように、怒り狂っている記者とカメラマンを見た。
「このクソバーテンダーっ!。ドアぐらいで済むと思うか?あぁ?。…いやがった。」
ミナミヤマは竹山の背中を睨みつけた。
「チクザンてめえ〜知ってやがっただろ〜?。」
「二人は現れなかったみたいだな…。」
「そのシャーアズナブルの物真似はいい加減にしやがれ。現れねえどころか、ウチの奥さんが若いツバメと浮気してやがった。」
「いいのか、ほっといて?。こんな所に飲みに来て?。」
「…俺の援交の女子高生もいやがった。俺を殺す気か?。」
「いや。奥さんと若いツバメをミナミヤマさんが殺さないように、配慮したつもりでしたが…余計なお世話でしたか?。」
「お前を殺す立派な動機が出来ちまったよ。おかげでお前を殺せなくなった。日本中の記者にバレちまったじゃねえかよ。」

「…それより。追っかけなくても？。二人はさっき、その裏口から出て行きましたよ。」
ミナミヤマはテーブルを持ち上げて、カウンターの中に投げ込んだ。
竹山も一色も微動だにしない。
「修理代は、社の方に請求しておきます。」
「このクソバーテン…。覚えてろよ。」
ミナミヤマとカメラマンは、自分で投げ込んだテーブルを自分でどかして、裏口に飛び込んで行った。
さらに、日本中の記者とテレビ局が、入口から押し寄せてきた。
「二人は裏口から出ました。…。」
と一色が言うので、そのまま裏口に流れ込んで行った。
「…ミナミヤマさんとカメラマンさんですが。」
と付け加えた部分は誰も聞いていなかった。

午前1時過ぎに、店は静けさを取り戻した。
「迷惑かけたな。ツリは要らねえよ。」
竹山は背広のポケットから、クシャクシャの有り金をカウンターに置いた。一色はそれを一枚一枚伸ばして、そのまま竹山に差し出した。
「今夜は私のおごりです。ハードボイルドあり、ラブロマンスあり…感動あり、涙あり…笑いあり、ドタバタあり…。楽しませて頂きました。…今日はいい日でした。」

「じゃあ、遠慮なく。」
竹山は、札を一色の手からもぎ取ると、ポケットに突っ込んだ。カウンターを降りると、一色が声を掛けてきた。
「これから行かれるんですか？。１２月２４日ですよね。雨屋（アメヤ）に？。

」
「あぁ俺のクリスマスは、清美のポスターを新しく貼り替えて過ごすのが決まりだ。キリスト教とは関係ねえ。たまたま２４日に清美が消えちまっただけの事だ。」
「もう３０年ですか…。」
「死体がありゃぁな。とっくに結婚して子供も居る人生なのに…。」
「生きてますよ。」
竹山は振り返って、一色に笑って見せた。
「毎年言ってくれるよな。煮ても焼いても喰えねえチンピラ記者だった頃から。クリスマスには…メリークリスマスじゃぁなく、生きてますよってね。ジングルベルじゃなく、大好きな君に会いに行こうでね。…小田和正は腹黒い商売人って思ってたけど、勘違いだった。謝りたいくらいさ…。」
「竹山さん。生きてますよ。」
「あー一色さん。生きてますよ。じゃぁな…。」
竹山は表口に消えた。一色は、竹山のオールドグランパからショットグラスにウイスキーを注ぐと、竹山に向かってグラスを掲げた。
「きよしこの夜。異教徒の竹山　透にも神のお恵みと、出来れば奇跡をお与え下さい。」
一色はゆっくりと、グラスのオールドグランパを喉に流し込んだ。
そして奇跡は、竹山に与えられる事になる。

ー第２話雨屋交差点につづく

ー第2話雨屋交差点

ー第２話雨屋交差点

竹山は東京の出版社で記者になって２０年近くになる。関東で岐阜の地理的位置を言える人は少ない。かつて発展性のある街ランキングで、那覇市に負けて最下位になった岐阜市に至っては、おおよその位置すら言える人はほとんどいない。例外は織田信長好きの人達で、濃姫あるいは帰蝶の実家として認識されている。

１２月２４日の一番列車を待って、新幹線で名古屋に向かう。名古屋で乗り換え改札を通り、東海道線の５番ホームから区間快速で岐阜駅に降り立った。

タクシーで上土居（かみつちい）と言うと金華橋通りを北上して、長良川を金華橋で渡りメモリアルセンターを越える。左に靴屋と自由書房という本屋があれば、その北の交差点が雨屋交差点だ。実家はそこから北に１キロの鳥羽川を渡った所にある。この辺りはかつて水田と桑畑しかなかった。３０年を過ぎて、新しく道路が付け替えられた。実家の西側になる小学校から、橋を渡って直線で伸びていた旧道は、角度を西側に２０度程度変えて付け替えられた。そのため新しく交差点が作られた。新しい交差点には、かつて農作業の人達が突然の雨をしのぐための小屋が存在した。それが雨屋（アメヤ）と呼ばれており、小屋がなくなった後地名として残った。それが雨屋交差点の名前の由来になっている。

３０年前。竹山が中学生の頃、雨屋は存在していた。１２月２４日透ちゃんだった竹山は、清美ちゃんと１７時に雨屋で会うはずだった。透ちゃんは３０分遅れた。１７時少し前に、同級生の母親が雨

屋に向かう清美ちゃんを見ている。ショートヘア、チェックのブラウスにスカート。ベージュのマフラーを巻き、白いハイソックスに赤の運動靴。赤の手編みの手袋。（ミトンと呼ばれる親指だけが分かれている。）
そして、両手でノートを胸で抱えるようにして歩いていた。
１７時３０分。雨屋の木の戸は、枠から外れて地面に倒れていた。
普通ではない事に気づいた透ちゃんは雨屋の中に入った。掛けられていた農機具が散乱し、積んであったムシロが壁に投げつけられている。清美ちゃんの姿はなく、奥の方で黒い影が動いた。
「清美ちゃん？。」
透ちゃんは呼びかけた。すると急に黒い影がビクッと動いて、透ちゃんの方に向かってきた。ニットの帽子をかぶり、黒いジャージを着た男が透ちゃんを突き飛ばして出て行った。ニット帽には、５角形の赤い星と青い星が重なったマークの上に、英語の文字が有った。最初の文字がＤで、そのあとスターという文字が記憶に残った。
呆然としていた時間がどれくらいなのか…起き上がった透ちゃんは、薄暗くなってゆく小屋の中に清美ちゃんの姿を捜した。どこにも見当たらない。
雨屋を飛び出した透ちゃんは３００メートル程にある中学校の職員室に飛び込み、残っていた担任に助けを求めた。折しも変質者が出没しており、誘拐事件となって捜査が開始された。
そして。３０年が。瞬く間に過ぎ去った。
住んでいた人達も徐々に入れ替わり、１２月２４日に現場に来てくれる同級生も、１０年前にひとりも来なくなった。２年前に清美ちゃんの弟はアメリカの現地法人に転勤になり、両親は老人ホームに入所した。以来竹山だけが、ポスターの貼り替えに来ている。

タクシーで実家までゆき、かつての自分の部屋に置いていた、新しくプリントアウトしたポスターを持って、３０年前のように歩いて、雨屋の有った場所に向かった。

交差点の南側は完全に水田も桑畑も無くなっているけれども、北側は水田が残っていた。
水田の所有者の好意で、木の枠を立てさせてもらい、ポスターを貼る場所が作られている。所有者も世代交代で、いい顔をしてくれない。竹山は季節の挨拶を欠かさないようにして、場所を確保していた。
かつての雨屋は、交差点のちょうど真ん中付近にあり、竹山は交差点の北西角にあるポスターが貼ってある場所に立った。
ポスターの写真は、３０年前の笑顔で竹山に微笑みかけていた。３年前までは雨ざらしだったが、この地域にも子供を狙った未遂事件が起きるようになり、子を持つ親達が透明の樹脂製ケースを寄付してくれた。一年を過ごして来た微笑みは、それでも色があせボコついていた。竹山はドライバーでケースのネジを外し、ポスターを貼り替えた。
ちょうど１６時３０分になった。この時間に来ていれば、彼女を救えたかもしれない。そんな想いが、この時間に込められていた。
ポスターには、ケースを寄付してくれた親達の要望で、こんなメッセージが書かれている。
ーこの地域から　絶対に2人目を出しませんー
捜索を願うよりも、防犯のポスターに変質してしまっても、竹山には彼女の顔が、この場所に掲げられている事に意味があった。
まだ。俺は捜しているんだという気持ちを、この場所から消す訳にはいかなかった。批判も多い。やめろと言う人達も居る。未来を見ろと何人もの人達が竹山を攻撃した。死体が出てこない限り、俺だけは捜し続ける義務があると反論しても、理解してくれる人は居なかった。警察は、現場に遺留品も血痕もなく、また竹山が見たニット帽のマークも見つける事が出来なかった。
捜査を指揮した岐阜北警察署の刑事が１０年前に退職した年のクリスマス。竹山がたたずむ雨屋交差点にやってきた。

「透くん。事件ってのは結局現場だ。かなり、色んな所に行ってるようだが…何十年でもこの現場に通う事だ。事件が決着するとしたら、この場所以外にあり得ない。あきらめたら負けだ。君にこの事件を任せる。必ず解決してくれ。」
「小谷さんは、解決すると思いますか？。」
「するさ。解決しない事件なんか無いんだ。ただ、警察の捜査には限界がある。事件はあまりにも多い。しかし君は、この事件だけを追える。その君から犯人は逃げられない。…犯人と清美ちゃんを見つけろ。この現場で。」

そう言った小谷刑事は去年亡くなった。通夜の席で、奥さんからダンボール箱一杯の捜査メモを渡された。小谷刑事は退職後も個人で捜査を続けていたという。そのダンボール箱の中に、ある資料が入れられていた。４年前に設立されたファッションブランドのニット帽だった。それに、針金でメモが付けられていた。

透くん。これが事件のカギだ。常識に囚われるな。事実だけを繋ぎ合わせろ

ニット帽には、赤い五角形の後ろ側に、青い五角形が重なっているデザインで、上にＤｏｂｕｌｅ　Ｓｔｅｒｓとブランド名が入っている。これが４年前に設立されたブランドでなければ、手掛かりとなる。竹山はトレードマーク。いわゆる登録商標を徹底的に調べた。しかし３０年前には、このトレードマークは存在していなかった。しかし竹山が見たのはこのマークだった。

そんな事を思い出しながら、腕時計は１７時になろうとしていた。
竹山は背広のポケットから、ウォークマンを取り出した。ストラップで首から下げ、イヤホンを耳に突っ込んだ。
ダイヤルを回し、Ｋａｚｕｍａｓａ　Ｏｄａを表示し、再生ボタンを押した。ピアノのイントロが流れ始めて、竹山は交差点の中央を見た。
何か奇妙だった。
何かと考えると、あれだけ走っていた車がピタリと通らなくなった。本屋の駐車場にも人気がなくなった。
大好きな君にを、小田和正が歌い始めた。竹山は、交差点の北西角から東南方向に向いていた。東南の角には駐車場と進学塾の校舎がある。その校舎が次第にボヤケて見え始めた。竹山はいったん目を閉じ、もう一度見た。
校舎は完全に焦点が合わなくなり、見えなくなった。
そして、再び焦点が合い始めたが、そこに校舎はなく水田が現れ、舗装した道路も消えた。
そして。雨屋が現れた。

目を大きく見開いた、竹山の目に飛び込んできたのは、吹き飛ぶ雨屋の戸とそこから出て来た清美だった。彼女はたたずむ竹山に向かって走ってくる。
立ち上がった竹山に向かって清美が抱きついて来た。
「たすけて。たすけて下さい。殺される。」
何が何やら解らない竹山の口から出た言葉は、ありふれた言葉だった。
「落ち着いて。大丈夫だ。俺が守ってやる。」
それは清美だった。髪型も服もマフラーも。手袋もソックスも靴も。その顔も…３０年前のあの日のままである事を除けば。幽霊ではなかった。しっかりと清美の体を竹山は感じていた。

清美はあの日のまま戻って来た。小谷刑事の言った通り、この現場に。
ならば犯人は。
１７時３０分になった。透ちゃんが入ってゆく…そして奴が飛び出してきた。Ｄｏｂｕｌｅ　Ｓｔｅｒｓのニット帽が。事もあろうに、そいつまでが竹山に向かってきた。少なくとも抱きつく為ではなさそうだ。
竹山はボクシングから空手、少林寺拳法までマスターしてきた…全ては犯人の為に。そして、ニット帽が繰り出してきたランボー２ナイフを持った腕を跳ね上げて、みぞおちに拳を叩き込んだが…わずかに急所を外して、気絶させられなかった。それでもニット帽は後ずさりして、みぞおちを押さえながら南に向かって逃走した。追いかけようとしたが、清美が抱きついて離れなかった。
「ダメ。行かないで。恐い。」
竹山は追跡を諦めて、清美を抱きしめた。そしてつい、恨み事が口を突いて出てきた。
「今まで、どこに行ってたんだ。３０年も、３０年も捜したんだぞ。」
腕の中の清美が顔を上げた。
「透ちゃん？。透ちゃんだよね。オジサンだけど。」
「なんで中学生のまんまなんだよ。４５才のはずだろ？。昭和３８年生まれだろ？。」
「今は何年なの？。」
「平成１９年だよ。」
「へいせい？。」
「昭和は６４年で終わってって…そんな事言ってる場合じゃねえよ。」
「わかんないけど…３０年たってるって事？。」
気づくと、雨屋は消えて交差点が戻って来ていた。進学塾の校舎もある。車も走り始めた。

そして清美は腕の中に居た。あの日のままで。問題は。
ニット帽のクソ野郎も、この街を逃げている事だった。
「透くん、これが事件の鍵だ…か。小谷さん、知ってたんなら前もって言って下さいよ。…どうすんだよ。１５才の女子中学生を。」
ブツブツ言っている竹山を、不思議そうな目で清美が見上げていた。

ー第３話君が戻ってきた理由に続く

ー第3話君が戻ってきた理由

ー第３話君が戻ってきた理由

その日竹山は、実家に清美を連れ帰った。明日１７時に、また雨屋が現れるかもしれない。彼女を帰さなければならないと竹山は考えていた。問題は、実家の両親だったが、それは拍子抜けもいい所だった。玄関に出て来た母親は、竹山の後ろから姿を現した清美にあっさりこう言った。

「アラ清美ちゃん。お帰り。あがって。」

「ありがとう、おばさん。」

清美は何の迷いもなく、３０年前と同じように居間に入って行ってしまった。

「待ってよ。少しは驚いたらどうなんだよ。」

「えっ？。あ～でも清美ちゃんじゃない。どう見たって。透は驚いたの？。」

そう言われると、さほど驚いていない自分を思った。

「俺は現場に居て、全部見てたからだけど、お母さんは突然だろ？。」

「３０年、私だって透がこうやって、清美ちゃんと入ってくるのを夢見てたのよ。毎日。だから驚かないわ。」

「居なくなった日のままでも？。」

「透だってあの日の清美ちゃんしか思い浮かばないでしょ？。大人になった清美ちゃんを思い浮かべられる？。だから、思ってたままだからね。」

そう言われると納得するしか無かった。
奥の居間から、すご～いという清美の声が聞こえてきた。母親は台所に行き、竹山は居間に入っていった。
父親がコタツに居て、清美は液晶テレビを横から覗き込んでいた。
「なに?。このテレビ。なんでこんなに薄いの?。透ちゃん。すごく綺麗だし。」
父親がそれに答えた。
「ブラウン管じゃないんだ。液晶だから。」
「えきしょう?。すごいね。」
「まあ座って。こっちに。」
清美は、３０年前と同じ窓を背にした位置にチョコンと座った。竹山は、父親をまじまじと見て言った。
「お父さんも驚かないのかよ。」
「何を驚く?。３０年も行方が判らなかった女の子が戻ってくるとしたら、これくらいの事はあっても良いだろう?。行方不明のまま戻らない人も居るのに文句を言うな。」
「そういう問題じゃないよ。」
「馬鹿が。今、清美ちゃんが消えたらどうする。」
「…なる程。」
(多少の異常性よりも、そっちの方を心配してるわけか)
竹山は、そんな気持ちを、何となく嬉しく思った。
「明日。もう一度雨屋交差点に行って、清美を帰してくるよ。」
テレビを見入っていた清美が竹山を見た。
「多分、帰れないと思う。」
「なんでさ。」
「私、透ちゃんとの約束守らせてってお願いしたら、ノートが爆発して、毛糸の帽子の人を吹き飛ばした。その次に木の戸を突き破って、今この世界に穴を開けた。私怖くて夢中で、ノートを拾ってこなかった。あのノートが無いと穴は開かないよ。」
「…わかった。拾いに行くよ。まだある。」

「でも、毛糸の帽子の人がまだ居るかも。」
「清美はここに居ろ。玄関のドアは鍵を掛けておくから。おじさんとおばさんのそばに居れば怖くないだろ？。」
「うん。」

竹山は母親の自転車で、雨屋交差点に戻った。
激しく車が行き交う交差点を、竹山はノートを求めて探した。その視線の先で、交差点のど真ん中に人が走り込んで行くのが見えた。激しくブレーキの音が鳴り、ドンドンと追突する音が竹山の怒りを爆発させた。ヘッドライトに照らし出されたニット帽の男が立ったまま竹山を見た。その右手には、マスメの入った茶色い表紙のノートが握られている。
「テメエは、どこまで喰えねえ野郎だ！。」
竹山も交差点に走り込んで行った。ニット帽は、追突されて車を降りてきた若い男を突き飛ばして、その車を奪うと竹山に向かってきた。
間一髪で車をよけて、車道に倒れ込んだ。顔を上げると、車は走り去ってゆく所だった。竹山は車に向かって叫んだ。
「クソッ。俺から逃げられると思うな！。俺は小谷さんから事件を引き継いでるんだ！。」

事故処理にパトカーがやってきて、車を盗まれた男に頼まれた竹山も証言した。しばらくして、覆面パトカーがもう一台やってきた。中から降りてきた刑事は、竹山を見つけると走り寄ってきた。
「透さん、僕が判りますか？。」
「えっ？。いや、判りません。」
「通夜で会ってます。小谷の息子です。」
竹山は、はっきり顔を覚えている訳では無かったが、息子が刑事に

なったという奥さんの話を思い出した。
「…あ～そうですか。」
「挽かれかけたそうじゃないですか？。例の奴なんですね。ダブルスターズのニット帽でピンときましたよ。今日は１２月２４日だし…。後ろが潰れた車で逃げたって、逃げ切れやしません。ナンバーも分かってるしね。」
「奴にノートを盗られました。取り返したいんです。」
「ノート？。どんな？。」
「茶色い表紙でマス目が入ってます。それから、奴はナイフを使います。腕はプロ級です。油断すると殺されますよ。」
「分かりました。手配しますよ。」
二代目小谷刑事は、覆面パトに戻って、無線を手にした。

「手配しました。すぐに捕まりますよ。…正直、ダブルスターズのニット帽を見せられた時、信じられなかったですよ。親父は死に際に、僕だけに言ったんです。犯人は未来から来たって…。だから、いつか雨屋の有った交差点に現れるって…。奴を過去に逃がすなって、息をひきとりました。」
「盗られたノートが、過去と今を繋ぐ穴を開けるんです。」
「なら、奴はここに戻ってくる。親父が言ってた事は全部本当なんですよ。でも…奴はノートを持ってたのに過去に戻れなかった…って事なのかな？。」
「…そんな感じがしました。交差点の真ん中で、ノートを握って立ってましたから…。」
「ノートだけじゃなくて、他にも何か必要かもしれない…。」
「例えば、清美自身とか…。清美が過去からその穴を通って、戻って来てるんです。」
「驚いた。…本当ですか？。」
「自分の目で見ますか？。」

「ぜひ。被害者以上に、事件を知ってる人物はいません。実は、あのニット帽の男の人相と手口…5件の事件で指名手配されてる人物と似てるんです。それに、清美さんが失踪する前の、変質者によるいたずら事件4件にも絡んでいると、僕は見てます。」

竹山は実家に戻って、清美に引き合わせた。小谷刑事はさすがに驚いた様子だったが、すぐに自分を冷静にコントロールして聴く態勢を作った。

「この刑事さんに、何が有ったか話して欲しい。」

清美は風呂から出て、子供の頃の竹山のパジャマを着て、テレビを見ていた。

「刑事さん?。」

「犯人を捕まえる為に必要なんだ。」

「ウン。5時に透ちゃんと雨屋で会う約束してた。雨屋に行く途中声がしたの。タスケテ。タスケテ。ヤダって。そしたらノートが爆発したの…。」

「さっきみたいに、飛んだのかい?。」

「…真上に飛んで、ノートは落ちてきた。かがんで拾うと…上から人が落ちてきた。」

「誰が?。」

「毛糸の帽子の人。」

「それで?。」

「そしたら、その人がノートよこせって言うの。でもこれは、透ちゃんの大事なノートだから、渡したくなかったの。それで逃げたの。雨屋に透ちゃんが居ると思って、中に入ったけど…居なくて。その人に押し倒されて、ノートが盗られそうになったから、神様にお願いしたら…ノートがまた爆発して…逃げたの。」

清美は小さく震えていた。竹山はそっと手を握ってやると、強く握り返してきた。小谷刑事はメモを執りながら言った。
「雨屋交差点の西にアパートが有りまして…その二階の廊下で、小学生の女の子が襲われてるんです。４年前ですけど…その子が、犯人は真下に落ちたって言ってるんです。混乱してたんだろうという事になったんですが…もう一度話しを聞くと、悪戯されそうになって、助けて嫌だって言ったら、茶色いノートが犯人の後ろから舞い上がって、犯人が真下に落ちたって、ノートも一緒に…話しが繋がりますよね？。」
父親が口を開いた。
「…そして犯人は３０年前に落ちた。戻る為に清美ちゃんを襲った。しかし、もう一度ノートを使って３０年前に戻ろうとしているのは何故だ？…もう戻る必要は無いだろう？。」
「３０年前なら、犯人は捕まらない。変質者の悪戯事件は犯人が捕まっていない。今のようにオンラインでデータベースを見たり、ＤＮＡ鑑定の捜査が出来ない。現行犯逮捕しか方法がない。奴は捕まらないばかりか、犯行を繰り返せる。」
小谷刑事は冷静に言った。
「死んでも帰さない。一生刑務所に叩き込んでやりますよ。小谷刑事。」
「それは警察の仕事です。お任せ下さい。…一応、今日は帰ります。犯人がここに来る可能性は小さいですが、戸締まりはしっかり御願いします。」
小谷刑事は帰っていった。

その夜。二階のかつての子供部屋にある、二段ベッドの中。
清美は下に、竹山は上で布団に入った。灯りは消さないでと言う清美の言葉で、部屋は明るかった。
「清美？。あのノート…俺のだって言ってたけど、何が書いてあっ

たんだ？。」
「え～っ？。覚えてないの？。」
「覚えてないんだ。」
「ひど～い。じゃあ、ふたりでした約束も？…。」
「あぁ。正直言うと。」
「思い出して。」
「えっ？。」
「思い出して。あんな大切な事忘れるなんて…ひどいよ。私はゼーッタイ言わないからね。」
「まいったな。俺はさ、清美が居なくなったショックで、それ以前の事がまったく思い出せなくなった…。本当に思い出せないんだ。なんで雨屋で待ち合わせたかも…まったく。」
「じゃあ、しょうがないか…ねぇ。」
「うん？。」
「上に行っていい？。」
「待て。中学生が言う事じゃないだろ。」
「好きな人と触れていたいって、そんなにいけない事なの？。透ちゃんは手も握ってくれなかった。でも、大人の透ちゃんなら、私の気持ちを許してくれるんじゃないの？。」
「俺は。１５才の透ちゃんじゃない。何人も女と寝て、汚れきったロクでなしだ。誰も幸せに出来なかった。清美に触れる資格は無い…。」
下で清美が起き上がる音がした。
「そんな事ないよ。透ちゃんは透ちゃんのままだよ。何も変わらない。私には分かる。私が逃げ出した時、しがみついたら、ちゃんと抱いて安心させてくれた。幸せに出来なかったわけじゃない。自分だけが幸せになれないって思ってただけ。だから自分を汚そうとしてきたけど…ちっとも汚れてなんかない。私は。透ちゃんに触れる権利がある。」
竹山はしばらく沈黙して言った。

「…なら。上がってこい。」
清美はスッと上がって来て、竹山の上で目を閉じた。
「ありがとう…やっぱり透ちゃんだ。どこまでも透ちゃんだ…。」
そう言うと、清美はすぐに寝息をたて始めた。
「変に心配した俺が考え過ぎか…。これは犯罪だぞ、明らかに。とてもじゃないが寝られないな。」
まんじりともしないで、清美の寝息を竹山は聴いていた。
そして…明け方の6時に時計を見ながら、竹山もスゥーと清美ちゃんの下で、眠りに落ちていった。

ー第4話30年前のプロポーズにつづく

ー第４話３０年前のプロポーズ

ー第４話３０年前のプロポーズ

雨戸がガラガラっと開く音で、竹山は目を覚ました。
携帯を開くと、７：００と出ていた。着信とメールが大量に入っていた。メールを開いている最中に、竹山はハッと気付いた。
「清美は？。」
携帯を持ったまま、そこで寝息をたてていた場所を見た。
「夢？。…リアル過ぎる、いかにも…。」
メールは、竹山の情報網になっている協力者からの、芸能人情報だった。その他には、殺すだの許さないだのと羅列されているクレーム。どれもまともに読む気になれなかった。
俺はいったい、この連中と何をやってるんだろう？。この２０年、なんでこんな事を続けて来たんだろう…そう思っている自分に竹山は驚いていた。
「今さら、どうもこうもないだろうタケヤマさんよ。」
竹山は芸能ニュースのサイトにアクセスして、見出しをザッと見た。バタフライエフェクトのアイドル二人は、うまく逃げ切ったようだった。

竹山は二段ベッドを降りて、下に降りていった。階段は玄関に向かって降りている。そこには小さな赤い靴が、横向に揃えてあった。

「夢じゃねえぞ、やっぱり。」
竹山は急いで居間に入って行った。
父親がコタツで、すでに朝食を食べていた。
「お～。透おはよう。」
「おはようって…それ何？。」
竹山は白い皿の上の、キャベツに載った茶色い物体に向かって言った。
「これか？。目玉焼きだそうだ！。よく焼けてるだろ？。」
「なんで焦げてるんだよ？。」
「おはよー。」
後ろから、バンダナを三角巾代わりに頭に巻いた清美が、お盆を持って居間に入って来た。これは、明らかに夢ではなかった。
「透ちゃんどうぞ。ちょっと焦げちゃったけど、これはこれでこおばしくてイケるよ！。」
父親と同じ物が、コタツの上に置かれた。
「あ～！。イケるぞ清美ちゃん！。」
「そう！。透ちゃん食べて！。」
竹山は妄想のチクザンから、透ちゃんに戻された。

「清美ちゃんさ～。ここに居ると騒ぎになるから、東京に来て欲しい。」
「騒ぎ？。」
「ここじゃ目立ち過ぎる。あのポスター通りの女の子が居るとさ…。」
「そうね。」
「東京なら、清美を知ってる人も居ないし、騒ぎにもならない。」
「うん。」
「ハジメと、ユウは分かるよな？。」
「もちろん。二人とも仲が悪くて、ユウはハジメが大嫌いって言っ

てた。」
竹山は、そうだったかな？という顔をした。
「今その二人、東京で子供三人つくって、アパート暮らししてる。二人に頼んで、清美を預かってもらおうと思ってる。俺は取材で、アパートにずっと居られないんだ。」
「待ってよ…。」
「駄目か？。」
「そうじゃなくって、ユウがハジメのお嫁さん？。」
「あぁ。」
「キャッー！。どうして！どうしてそうなったの！。ね～なんで！。すご～い！。」
「同窓会で再会して、ケンカしてた思い出で盛り上がったまま勢いで…ユウが妊娠して…子供にする話しじゃねえよ。」
「え～！。クラスメイトの話しだよ！。やる～ユウ。お母さんなんだ。いいな～。私も早くお嫁さんになりたいよ。」
何気ない顔で父親が会話に割り込んできた。
「透のお嫁さんになれば良い。二人ともそのつもりだろ？。」
「待った。そんな無責任な事を親が言うなよ！。清美は元の世界に戻す。」
「そーかぁ？。このまま、この世界で暮らすのも悪くないと思うがな…。」
「向こうの透ちゃんはどうするんだよ。雨屋に入ってくのをこの目で見た。俺と同じ苦しみを背負って、３０年生きて行くのか？。それはさせない。あんな苦しみは俺だけでいい。この清美ちゃんには、戻って透ちゃんを支えてやって欲しい…そう思ってる。」
父親はジッと竹山を見た。
「いいのか？。また一人で、芸能人を追いかけまわして生きて行くのか？。お前は、そんな生き方を望んでないはずだ。自分だけ幸せになっちゃいけないと思い込んでるから、ロクでもない人間を演じてるだけだ。それも田舎芝居で…見てる方はバレバレだ。」

「好きに言えばいいさ。」
父親と竹山は沈黙した。３０年間分かっていても、二人ともどうしようもない事だった。このちっちゃな清美が解決かも知れないが、竹山はそれをすべきでないと思った。
清美は、そんな二人を不思議そうに見ていた。
「…でも、透ちゃんが約束果たさないと、私はお嫁さんになれないよ。」
今度は、透が不思議そうな顔で清美を見た。
「俺は、何を約束したんだ?。」
「それは、透ちゃんが思い出して。女の子には大切な、プロポーズの言葉だから…。」
「俺が?プロポーズした?。清美に?。１５の俺に、そんなガッツはないよ。」
「ビックリしたよ…でも、言えそうにない透ちゃんが言ったから…信じられた。本当の気持ちだって。だから…私はその気持ちに応えようと思った。」
竹山は思い出す事が出来なかった。雨屋に行く前に、何を約束したかを…。
「なんとか、思い出してみるよ。…とにかく、飯を食ったら行くぞ。」
「うん。ユウに会いに行く。」

父親が岐阜駅まで、車で送ってくれた。車の中で携帯が鳴った。
「小谷です。すいません。犯人に逃げられました。ＪＲ一宮駅で、盗まれた車が見つかりました。犯人は電車で、岐阜方面に向かったのが目撃されてます。」
「野郎は、普通じゃ捕まりませんよ。こっちは、東京にいったん戻ります。同級生の夫婦に清美を預かってもらうつもりです。」
「それは、いい考えです。犯人の動向が分かったら、また電話しま

す。」
竹山は携帯を切った。清美がそれを見て言った。
「そのトランシーバーもちっちゃいね。」
「？…。これは、電話だよ。」
「電話？。電話線はどこ？。」
父親が笑って言った。
「清美ちゃんの時代には、携帯はまだ無かったんだな。まあ、電波飛ばしてるんだからトランシーバーでもいいさ。でも電話局を通してるから電話だな。」
「そうなんだ。すごいね。」

駅前で、父親に見送られて岐阜駅に二人で入って行った。
ホームに立っている二人は、親子か援交しているようにも見えた。
しかし、清美は恋人のつもりだった。
「人前では、おとうさんだぜ。」
「誰が？。ふふふ…。可笑しくて、笑っちゃうよ。言えないよ。そんなの。」
「不審に思われたら、トラブルになるんだ。未成年と性的交渉をすると逮捕される。疑われたら、警察に連れて行かれる。わかるか？」
「愛し合っててて？。」
「関係ない。愛し合わなくても、金銭関係で性的交渉をする大人と子供がいるんだ。それは犯罪で罰せられる。」
「分かった。お芝居するよ。逮捕されたら、大変だね。」

名古屋に出て、のぞみの指定席に座った。新幹線にはしゃいでいる清美を見ながら、自分の妄想チクザンが、小さくなって行くのを感じていた。しかし、自分が妄想チクザンでなくなって何になるのか…竹山には分からなかった。ただ、清美の為に何かができる…３０年間出来なかった事を取り戻せた事を、このちっちゃな清美に感謝

した。
山のような苦難さえ、苦にならないだろう力を与えてくれる彼女に
…。

ー第5話平井駅前行き都営バスにつづく

ー第５話平井駅前行き都営バス

ー第５話平井駅前行き都営バス

小谷刑事は、ＪＲ一宮駅前で覆面パトを停めて、携帯を切った。犯人は、後ろのへこんだ車で、散々目撃情報を撒き散らしながら、警察の対応を回避して、電車に乗ってしまった。
後輩の三ツ矢が、心配そうに小谷を見つめていた。
「小谷さん。なんで捕まらないんすか？。」
「こっちのやり方を知り抜いてる感じだな…。検問の無い、たった一ヶ所を突破された。あの道を知ってるのは地元でもそうはいない。」
「でも、雨屋に戻らざるおえないわけでしょ？。」
小谷は遠くを見る目になって言った。
「…オヤジなら、犯人は竹山を追う…って言うだろうな…。」
「どうしてです？。」
「３０年前の雨屋に戻るには、ノートと清美さんが必要だとして…一緒に居るランドマークは竹山だ。奴ならすぐに、竹山のアパートを割り出すぞ。アパートで待ち伏せる…奴なら。」
「じゃあ、岐阜に向かったのは陽動ですか？。」
「クソッ。犯人が乗ったのは普通列車だ。途中の駅で名古屋行きに乗り換えられる。すぐに名古屋駅の新幹線乗り換え口を押さえるよ

うに言え！。」
三ツ矢は慌てて無線をつかんだ。
しかし、警官が新幹線乗り換え口と新幹線ホーム、東海道線のホームを固めた頃。すでにニット帽の男は、発車した東海道線の各駅停車浜松行きの車内にいた。

その数時間後。東京。
竹山と清美は、いったん本所吾妻橋のアパートに寄った後、平井駅前行き都営バスに乗って、平井七丁目に向かっていた。
「どこで降りるの…とおっじゃなくって…おとうさん？。」
「平井七丁目第三アパート前。」
「ふ～ん。東京って変な街だね。」
「変？。」
「ずーっと同じような景色が、途切れないで続くね。」
「それが変か？。」
「だって岐阜なら、川があったり田んぼがあったり山があったりするじゃない。」
「都会だからさ。」
「じゃあ都会って、つまんないね。住んでると飽きちゃうんじゃない？。」
「そうかもな。時々現実感が無くなるのは、飽きてるのかも知れない。」
「おとうさん、私とずっと一緒に居るけど、仕事はいいの？。」
「サラリーマンじゃないんだ。毎日会社に行く必要はない。」
「何やってるの？。」
「週刊誌の記者をやってる。」
「えっー！。週刊誌って歌手とかに会う？。」
「まぁな。」
「すごい！。天地真理とかに会った。」

さすがに彼女のその後を話す気は、竹山には無かった。
「会ったけど、彼女は引退した。今は一般の人だ。」
「じゃあ…。」
清美は知っている芸能人を並べたが、ほとんどが表舞台から姿を消していた。
「ほとんど、みんな居ないんだ…。昨日テレビ見てても、知らない人ばっかり。でもさ！。宮原まなぶって子、すごくカワイイ！。ファンになっちゃいそう。」
「あ～、あいつはオススメだ。裏も表もない。あいつは男だ。ただし、彼女がいる。」
「えっー！。…残念。でも本当？。」
「昨日、岐阜に行く前に会った。マスコミに、デートの現場押さえられそうになって、俺が助けてやった。」
「すごいね。ね～サインとかもらえる？。」
「俺が宮原にか？。」
有り得ねえと心の中で思った顔を、清美は誤解した。
「やきもち焼いてるの？。とおるちゃん？」
こういう質問は、１５だろうが２０だろうが４０だろうが女は変わらない。そして、男の受けも変わらない。清美は嬉しそうで、竹山は憮然としている。
「うれしい！。そういうの見てみたかった。」
「何が？。」
「透ちゃんが、やきもち焼くの。」
「焼いてねえよ。」
「ウソ～！。顔が真剣だよ！。」
「今は、顔がマジって言うんだよ。」
「まじって？。」
「真面目が縮まって、マジ。」
「何か変。でも流行ってるんだ。」
「マジでな。」

「そうやって、使うんだ…。」
清美は少し冷めた顔になって、バスの外を見てから、竹山に向き直った。バスは八広二丁目のバス停で停車した。一人が降り三人が乗ってきた。
「もし…戻れなかったら。本当の気持ちは…戻れない方がって思ってるけど…私をよろしくお願いします。全部勉強だけど、言葉から覚えてく。」
「俺は、そのつもりだ。でも、戻す。向こうの世界の透ちゃんの為に、命をかけてでも。」
「うれしい！。すごくマジで！。」
「チョーマジで。」
「チョーマジで。透ちゃんが、こんなに熱い人だなんて知らなかった。」
「これは熱くなるだろうさ。あの頃だって熱かったさ。言葉を知らなかっただけで…。」
清美は突然吹き出した。
「何だ。びっくりするじゃないか。なんで笑うんだよ。」
「…ふふふ。だって、プロポーズの言葉…開会式の挨拶みたいだったんだもん。」
「おま…そりゃないだろ。何言ったか知らねえけど…。」
「いいの。わかった。言葉じゃないって。聞く側がどれだけ相手の気持ちを理解できるかが大切なの。私はまだその努力が足りないの。」
「あー足りてない。そんな事言うのはな。」
「なんか腹たつ。その言い方。」
「なんかムカツク…だな。」
「むかつく？。なんか吐きそうじゃない、それ。」
竹山は笑った。
「そりゃいい！。ムカツクって言われたら、便所で吐いてこいってギャグに使えるな。」

バスのアナウンスが、平井七丁目第三アパート前を告げた。
「降りるぞ！。清美。」
竹山は小銭を二人分確認して立ち上がった。

その頃。浜松で新幹線こだまに乗り換えたニット帽の男は、竹山が記事を書いている週刊タレントインフォメーションＤＸ誌で編集部の住所を確認していた。
竹山のアパートの住所は、ポスターの連絡先からすでに割り出していた。

ー第６話平井七丁目第四アパートにつづく

ー第６話平井七丁目第四アパート

ー第６話平井七丁目第四アパート

第三アパート前の停留所を降りて、隣の第四アパートに、二人は歩いていった。長沼（ながぬま）　始（はじめ）と近藤（こんどう）　優（ゆう）は７年前の同窓会で再会して、翌年結婚した。長女６才を頭に、５才の長男４才の次女がいる。
ハジメは、東大で物理学の助教授をやるかたわら、ＳＦ小説を科学雑誌に連載している。マニアック過ぎて、一部に熱狂的な信者がいるが、出版の話は無い。
竹山は記者になる前から、ハジメに作家になれと言われ続けてきたが、竹山は拒否し続けてきた。同級生の中では、竹山のただひとりの理解者だった。
東京駅で電話すると、長沼一家はアパートに居るという事だった。

ドアのチャイムを鳴らすと、ドアを開けたのは長女の直ちゃんだった。
「あっ、チクザンのおじちゃん来たよ！。」
と言って、ドアを開けたまま奥に走り込んでいった。
清美が目を丸くした。
「まだちっちゃいんだ。ユウの子。」
そこに、上下ジャージで化粧気もなく、髪も短くした子育てモード全開のユウが出てきた。
「あー入って、透くん。散らかってるけど…元気だった？。」
そう言いながら、竹山の後ろの清美に視線を走らせた。

「ウソ清美?。久しぶり。どうなってるのよこれ!。」
竹山が答えるスキを与えず、清美が前に出てきた。
「ユウすごい!。すっかりお母さんじゃない!。さっきの子ユウの子でしょーそっくりじゃないユウに!。」
「そう?。性格も似てるのよ〜まいっちゃう。」
「でも…ハジメ嫌いだって言ってたのに、どうしてよ。」
「まぁ色々あったのよ。」
奥からハジメの声がした。
「玄関で何やってんだよ。上がってもらえよ。」
「今のハジメ?。ユウ?。」
「そう。」
「ナニおやじ振っちゃって。」
ユウが戸惑うのを見て、竹山が清美をたしなめた。
「おやじなんだよハジメは…とにかく上がらせてもらおう。」
「あっ。そう、上がって上がって。」
ユウは異変に気付いたようだ…清美が若い事に…。
ハジメは居間で清美を見ても、竹山の両親と同じように、驚かなかった。
「おい、どこで見つけたんだ清美を!。」
ハジメはユウの顔をチラッと見て言った。竹山は、清美が現れた一部始終を二人に話した。

三人の子供が、清美にすっかりなついて、おとなしくしているのを見て、驚きながらユウは言った。
「言われてみると、若いのは変だけど…とおる君のお母さんと同じね。違和感無かったよね…パパ?。」
「無いよ。最後の記憶のままだからだな。」
「ハジメ?。こういうのは物理学者としては、どう説明するんだ?。」

竹山に言われて、ハジメは少し遠くを見る目になった後、言った。
「物理学者としてじゃなく…ＳＦ作家としてなら、説明はある。」
「なんだよ？。」
「多次元宇宙論って奴だな。」
「それは、日本語で説明できるのか？。数式とかじゃなく…。」
「できるよ。タイムトラベルの矛盾を解決するために便利な道具だ。要するに、過去に戻って自分の父親を殺したら、どうなるかって奴だ。多次元宇宙論なら問題は起こらない。」
「なんでさ。」
「つまり、今いるこの世界と同じ世界が、幾つも平行して存在している…と言うのが多次元宇宙論だ。その宇宙の中には、俺達の宇宙よりも、まだ時間的に過去の宇宙もある。そこに行って父親を殺しても、自分には影響ない。」
「でもそれじゃあ、過去に行っても、未来は変えられないって事か？。」
「そこなんだな…他の宇宙からも同じ事をしに、俺達の宇宙に来て失敗したから、自分は存在していると考える…また、来ようとして来られ無かったとも考える。」
「つまり、この世界の過去は改変されない。結果は確定されているって事か…。」
「もし…この清美が自分の宇宙に戻れば、その宇宙の未来は俺達の宇宙とは違う結果になるだろうな。でも気になるのは…。」
「何が気になる？。」
「どうして穴が開いたかだ…俺達の宇宙の清美は戻ってない。つまり戻って来るのに失敗した。穴が開かなかったんだ。」
「犯人にやられちゃたって事か？。」
「…ノートを取り戻せなかったか…まてよー、犯人だけが穴を通ったんだ。その犯人が、この清美の宇宙にも穴を開けて落ちた…小谷刑事の話さ。それで、この清美がやって来た。」
「それなら、元々犯人はノートを持ってなきゃおかしいよ。」

清美は口を挟んだ。
「ノートは2冊あるよ。毛糸の帽子の人が落ちて来た時に、2冊になって落ちてきた。」
「つじつまは合う訳か…。」
「でもさ…。」
「なんだユウ?。」
「この清美が戻っても、このとおる君の所に清美は戻って来ない…って事?。」
ハジメは済まなさそうな顔で答えた。
「とおるには気の毒だが、そうなるな。俺達の宇宙のノートは、今犯人が持ってる。取り戻して、こっちから穴を開ければ、清美は戻せるかもしれないけど…。」
「待ってよパパ。宇宙はいっぱいあるんでしょ?。どうやって目的の宇宙に穴を開けるの?。」
「ノートが知ってるんだ。この宇宙のノートで穴を開ければ、持ち主の宇宙に穴が開く。だから、ノートは2冊存在しているんだ。」
ユウの眉間にたてジワが寄った。
「なーんかさ〜。ややこしいね。パパ、もっと簡単にならないの?。」
「簡単にしやぁ良いってもんでもないだろ。」
話しが途切れた所で竹山は本題を切り出した。
「そこで相談なんだけど…。」
「とおる君としては、清美を預かって欲しいと?。」
ユウにはお見通しだったようだ。
「それは可能かな?。」
「私は問題ない。親友だし…子供達は静かになるし。あとはパパね…。」
「理論的に引き受けない理由は無い。」
「助かる。そろそろ仕事を始めないと、締め切りも近いし。」
竹山は清美を預けてアパートを出た。清美はユウと居れば、落ち着

いていられるようだった。ただ、毎日電話するように約束させられた。

そして、竹山のアパートに侵入したニット帽の男が、包丁を畳に突き刺して出て行った事を知るのは、次の日の夜だった。

ー第7話タレントインフォメーション社編集部につづく

ー第7話タレントインフォメーション社編集部

ー第7話タレントインフォメーション社編集部

情報提供者から得た情報で、麻布十番駅前から少し行った二ノ橋で取材した竹山は、編集部に戻って来た。
「おーチクザン。空き巣にやられたって？。」
編集長の脇阪（わきさか）がパソコンを打ちながら、声を掛けてきた。
「被害なし。包丁が畳に突き立ってました。怨恨でしょうね…。」
「そんなガッツのあるタレントって言ったら…いや、事務所の方か？。」
「やりかねない連中の名前挙げてたら、仕事になりませんよ。」
「だな。」
脇阪は話を打ち切ったが、竹山はその包丁がメモ用紙も突き破っていた事を言わなかった。
ーガキを渡せ
さもないと
殺すー
とマジックで殴り書きされていた。ニット帽が殺しに来るのなら、竹山は逆にノートを取り返すチャンスだと思っていた。奴のナイフ捌きはプロ級だが、竹山がさばけない程ではない。彼の動きは、基本に忠実すぎて、読み切る事が出来ると竹山は感じていた。
自分のデスクのパソコンで、子供を狙った事件のサイトを開いた。

さんざん見てきたサイトだが、４年前の岐阜の事件を検索してみた。
ノートが舞い上がった証言が小谷刑事よりも詳しく掲載されていた。
犯人の似顔絵もあり、それに関連した掲示板を覗くと、分部（わけべ）　豊（ゆたか）と言う名前がひんぱんに出て来ていた。犯人は彼だろうというのが、書き込みの大半の意見だった。竹山はそこから、容疑者プロフィールという、人権無視のリストに飛んだ。推理小説マニアが巧妙に隠しているリストだが、的中率は９９・９パーセントという過去の実績がこのリストを存続させていた。
分部で検索すると、なんとも顔写真入りでプロフィールが出てくる。生年月日からすると、今年２５才。姉の名前が分部　舞（わけべ　まい）。
「わけべ　まい。あの舞か…。」
６年前。当時２０才の人気女優で、ストーカーにベランダから入り込まれ、揉み合った挙げ句ベランダから落ち、半身不随で引退した。部屋に逃げ込む前から、携帯で警察に救けを求めていたにも関わらず、警官が来たのは３０分後で全ては終わっていた。
弟の豊は、その現場に駆けつけ、現場検証をしていた警官に、ナイフを振り回して重傷を負わせ、逮捕された。彼は2年の実刑を言い渡され服役した。その刑を終え出所した時期にノートの事件は起きている。被害者の証言の中に、犯人の言葉として
ーおまわりはこねえー。３０分後だ。見るも無残にしてやるー
と言ったとされている。
「ひねくれた上に、見当違いの復讐心か…。」
竹山はデビュー当時の分部　舞の実家を取材した事がある。ライターやアクセサリー、ナイフを扱っている店を経営していた。
「ナイフ…。」
竹山は、その時にこの店のホームページを見た記憶があった。アクセスしてみたが、ホームページは無くなっていた。
しかし記憶では、雨屋交差点からさほど遠くない、鷺山本通りにあったはずだった。
竹山は小谷刑事を携帯で呼び出した。

「…竹山です。犯人の話しなんですが、分部　豊は犯人リストに上がってるんですか？。」
ー7番目位ですね…足の悪いお姉さんが岐阜にいたんですが…結婚して愛知県の方に行った後…鷺山本通りの実家は、誰も住んでないようですー
「ナイフを扱ってる店でしたよね？。」
ー今は閉まってます。分部　豊が服役した時点で閉めたようですー
「彼が実家を出入りしている可能性は？。」
ーそれはなんとも…人手に渡ってる訳ではないので、鍵を持ってれば可能でしょうー
「…豊だと思うんですが。ニット帽の男は。」
ー状況証拠ばかりですが…実は僕も同じ意見です。ここらへんの地理に詳し過ぎるんですよ犯人が…ところで、そっちは大丈夫ですか？ー
「アパートに侵入されました。清美は別の場所に居て良かったんですが…脅迫状付きで。」
ー警察には届けました？。保護を求めて下さい！。危険ですー
ドンッ。と音がして、編集部のドアが開いた。
「小谷刑事。分部登場です。そっちから警視庁の方に１１０番してもらえます？。」
ー透さん！逃げるんだ！。警官が行くまでもたない！ー
「わかってます。」
竹山は携帯を切ると、入口に立っている分部を見据えた。
「編集長？。俺のアパートに包丁立ててった方です。席をはずしてもらえますか？」
脇阪編集長は、それを逃げろと言う意味だと理解して、昔写真現像の暗室だった部屋に飛び込んで、中から鍵を掛けた。
「伝言は受け取って貰えましたか？。竹山さん。」
手には何も持っていない。だがマジックのように、ナイフは出てくるはずだった。

「分部。お前に清美を渡すつもりはない。」
「なんで、俺の名前を知ってる。」
「警察は、もう指名手配している。逃げられないぞ。」
「……はったりだな。まだだ。アイツらは眠くなるくらい遅くてノロマだ。…で？。どこだガキは？。」
「なんで清美が要るんだ？。分部。」
「…戻る。ここにゃ小谷ってウルサイ蝿がいる。老いぼれは死んだが…息子がブンブン耳元で飛び回る。」
「蝿はお前の方だ。」
「あぁ？。…まあいい。これが見えるか？。」
分部はナイフではなく、ノートを手にしていた。それを一冊づつ両手に握った。
「こっちはガキが持ってたノート。表紙の角が破れてる。こっちはもう一人のガキが持ってたノート。破れてない。このもう一人のガキは、戻れずにあっちの世界に行ったまま…このノートを俺が燃やしたら、あのガキは戻って来られなくなる。永遠に。いいのか？。」
「お前が約束を守るとは思えんな。」
「どっちにしろ…このチャンスにつけ込むしかないだろう？。竹山さん。」
「そのつもりだ。」
「だったら一週間後の日曜日の１７時。雨屋交差点にガキを連れて来い。勝負だ…竹山さん。あんたと警察に大恥をかかせて差し上げる。」
分部はスッと消えた。入れ替わりに警官二人が駆け込んできた。
「竹山さん？。無事ですか？。」
「ほぼね。」
警察は事情聴取して帰って行った。分部は、これ以上襲ってくるつもりは無いように思えた。
だが。思った以上に分部は喰えない奴だった。

ー第8話チェイスにつづく

ー第8話チェイス

ー第8話チェイス

6日が過ぎ、竹山は再び平井七丁目に、清美を迎えに行った。
「出来れば、私達も行きたいよ。雨屋に…。」
ユウは名残惜しそうだった。
「子供達を危険にさらせないよ、ユウ。」
竹山は言った。母親の後ろで、三人の子供は泣いていた。そんな子供達を見て、ユウは竹山に言った。
「ねぇ…清美はいいお母さんになるよ。…。」
清美は子供達に触れながら、離れた。ユウも涙を浮かべながら言った。
「はい、清美ねえちゃんにバイバイして…。」
三人とも、ロボットのように手を振るのが可笑しかったが、余計に涙を誘った。
「みんな。ユウ母さんの言う事聞いて、いい子でいるんだよ。」
子供達が揃ってハイと答えた。清美が、竹山には少し大人になって見えた。
アパートのベランダから、手を振る四人に清美は、何度も振り返って手を振った。
「どうだった?。ユウの所は。」
「あんな家族をつくりたい。大変だけど。」
「やれるさ。清美なら。」

「うん？。なんか人事みたいだけど？。まぁいいか…。」
清美は照れたように笑った。

平井七丁目第三アパート前のバス停に来た時に、タクシーがやってくるのが見えた。
「とおるちゃん！。タクシーで行こうよ。」
「別にいいけど…。」
手を挙げた訳でも無いのに、タクシーは二人の前に停車した。
同時に、別の車がタクシーの後ろに停車して、中からハジメが顔を出した。
「とおる！。乗ってけよ。送ってくよ。」
「ハジメ？。大学で臨時講議じゃないのか？。」
「休講になった。ついでだから、送ってくよ。」
竹山は、ハジメの車の方に向いた為に、タクシーの運転席のドアが開いた事に、気付くのが遅れた。
手をつないでいた、清美の手がグッと引っ張られて、車内に引き込もうとしている運転手の顔を見た。
「分部？。てめえ！。」
慌てふためいてハジメも降りて来て、引っ張り合いになった。しかし分部は、常識外れの行動に出た。ドアを開けたまま清美を引きずって、車を発進させた。
「痛いっ！。」
という清美の声に、思わず竹山とハジメの手がゆるんだ。分部は巧みに清美を車内に引き込んで、走り出した。
「追うぞ！。」
竹山は叫んで、ハジメの車に乗り込んだ。ハジメも後部座席に飛び込んで、カーチェイスになった。分部は何故か、バス路線沿いに上野に向かって走ってゆく。
「ここらへんの土地勘はないな。」

竹山は路地に入り、先回りを試みた。
「警察を呼ぶぞ！とおる！。」
「やめろ！ノートを燃やされたら終わりだ…。」
脇道から、バス道路を塞ぐように車を停めた。分部は急ブレーキを踏んで、タクシーをスピンさせ、歩道に乗り上げて車を停めた。
助手席のドアから、清美が這い出してくるのが見えた。手には見事に、一冊ノートを握っている。
「少しは流れが変わってきたぞ！。ハジメ！。」
竹山は車を降りて、追いかけるだろう分部の動きを封じようと、助手席側に回り込んだ。少し気を失っていた分部が、清美を追いかけるために、飛び出そうとするのと鉢合わせになる。
竹山の右のストレートを分部は左肘で跳ね上げてすり抜け、車外に出た。お互いに間合いを保ちながら、にらみ合いになる。清美はハジメの車に逃げ込み、ハジメは車を発進させた。
「やるな。竹山、ガキペア。」
「お前を甘く見てた。ここまでやるとはな…。このタクシーの運転手はどうした？。」
「心配するな。おっさんは殺さない。今日はここまでだ。背中に気を付けるんだな…。」
分部はタクシーに戻ると逃げ去った。
竹山は、ハジメの携帯をコールした。
「俺だ。戻って来てくれ。分部は逃げた。」
2分くらいで、ハジメは戻って来ると、竹山を乗せてすぐに車を出した。

「ノートを取ったよ！。とおるちゃん！。」
清美が誇らしげにノートを見せた。ノートの表紙の角が破れていない。
「清美。お前の持ってたノート。表紙のココが破れてたか？。」

「うん。最初から破れ…あれ？破れてないよ。」
「それは、俺の世界の清美のノートだ。それでは、お前を戻せない。」
「…でも、これがあれば、この世界の清美は戻せるんでしょ？。」
「分部の言う事が正しければな。」
「とおる。とりあえず試したらどうだ？…。」
運転しながら、ハジメが言った。
「…それに、もう新幹線とかじゃ、また襲われるかもしれない。このまま東名で岐阜に行くぞ！。」
「いいのか？。大学は？。」
「ハジメがやらねば誰がやるさ…俺もお前らと一緒に戦いたくなった。」
「すまない。」
「あやまるな…。お前と清美を放っといた、同級生全員の罪滅ぼしだ。」

車は東名高速に入って、車内は静かな空気が流れ始めた。
「とおるちゃん。このノート見て。きっと約束を思い出すよ。」
「あぁ…。」
竹山は、清美からノートを受け取った。
茶色に赤います目が入っている。3年1組　竹山　透と書いてある。
開けると、末次　清美ちゃんに捧げると、1ページ目に書いてある。
ページをめくると、
ー星への階段ー

とタイトルがあり、下にーこの梯子では　今は届かなくてもーとサブタイトルがあった。
そしてビッシリと、その後のページが、鉛筆の文字で埋められてい

た。
「これは…俺が書いたのか?。」
「そだよ。なんか変なとこも有るけど、読むと泣いちゃうよ。すごくいい物語なんだもん。」
竹山は…とおるちゃんに戻っていった。そして言葉が出た。
「…もし俺が小説家になったら、清美ちゃんをお嫁さんにしてあげるよ。絶対約束する。……そうか。そうだったな。思い出したよ。でも、してあげるはちょっと違うよな。」
「いいの。ちょっと生意気って思ったけど…私はお嫁さんにして欲しいって思ったから…。」
清美は恥ずかしそうに顔を赤らめて、うつむいていた。
「…てっ事は。俺は失格かぁ…小説家にならなかった。」
運転席のハジメが言った。
「今からだって遅くはないだろ。正直、お前の週刊誌の記事。ちゃんとした小説書けば、印税で食っていけるだけの才能はあると思うぜ。」
「よせよ。妄想のチクザンの小説を誰が読むんだよ…。読んだらゴミ箱行きが、俺にはお似合いだ。」
「待て!。約束したんだろう?。男なら、好きな女との約束は果たせよ!。」
竹山は、泣き顔になっている清美を見た。
「泣くな…小説家になるよ。どうやったら成れるのか、見当もつかないけど…。」
「うん。」
竹山は、隣りに座っている清美を抱き寄せた。今まで命がけでやった事など、ひとつもなかった。しかし、これは命をかけてでもやる…そんな気持ちが湧いてくるのを、竹山は感じていた。

ー第9話人質につづく

ー第9話　人質

ー第９話人質

岐阜市北部の山際に造られている、老人ホームひだまりの里。末次（すえつぐ）勝利（かつとし）よしこ夫妻は、日当たりの良い食堂でボンヤリとしていた。昼過ぎから、岐阜県警は竹山の情報を受けて、警戒態勢をとっていた。しかし、この清美の両親まで考えが及んでいなかった。夫の勝利は、５年前に脳梗塞を患い、左半身が不自由で、言語障害でうまくしゃべれなくなった。ただしリハビリによって自力歩行ができ、身の回りの事も自分で出来る。妻のよしこは、足の関節が悪く、車椅子での生活になっている。

ひだまりの里正面玄関に、練馬ナンバーのタクシーが停まったのは、１３時過ぎだった。中から運転手が降りて来て、何の事やらわからないまま、よしこの車椅子を押して走り出し、追いかける職員を振り切って、よしこをタクシーに放り込み、タイヤの軋む音を残して走り去った。

街中から練馬ナンバーのタクシーを見たとの通報を受けて、小谷がひだまりの里の前まで来た時、そのタクシーが前をかすめていった。

「先輩っ！。誰を狙ったんすか？分部は！。」

危うく衝突を免れた三ツ矢は、タクシーを追いながら、怒った顔で怒鳴った。

「知らん。ともかく誰か人質が乗ってたぞ。」

裏道を二つ曲がった所で、タクシーを見失った。
「またか！。いい加減腹が立ってきましたよ、分部には。クソッ！」
「ひだまりの里に戻って、誰が誘拐されたか確認するぞ。」
小谷には見当がついていた。

ひだまりの里の入り口には、老人が立って意味不明の叫び声を上げていた。職員が中に戻そうとしても、聞き入れない様子だった。
小谷が警察手帳で身分を示すと、職員が事情を話してくれた。
「１１０番でも言ったんですが、末次よしこさんが誘拐されました。この方がよしこさんの旦那さんで勝利さんなんですが、うまく言葉がしゃべれなくて…。」
「奥さんを追いかけたいんでしょう？」
叫んでいた老人は、急に静かになり首を縦に振った。
「行きましょう、我々と。」
職員が慌てた。
「待って下さい！。許可無く入所者を出せません。」
「では許可を頂きたい。末次さんに捜査協力を要請します。」
「はぁ…。」
小谷は、戸惑う職員を無視して、勝利を覆面パトカーに手を引いて乗せると、三ツ矢に告げた。
「雨屋だ！。三ツ矢。」
「どういう繋がりです？。」
「清美さんの名字は末次だ。この方はお父さんで、よしこさんはお母さんだ。」
「いちいちアドバンテージを稼ろうって魂胆ですか！。あの野郎。」
「こんなもんがアドバンテージでもなんでもない事を思い知らせてやるさ…。」
１６時には、雨屋交差点に通じる道路は、封鎖された。ただ、分部

が入って来れるように、北側だけバリケードではなくパトカーで封鎖してあった。さらに交差点自体は、コンクリートブロックの車止めとフェンスで囲んであった。
名目は不発弾処理で、１キロ以内の住民は避難させられていた。分部とその事情は、県警本部長と幹部だけが知らされていた。こんな話をいきなり信じられる人間は居ないと判断されたからだ。
かつて、この幹部全員が、清美の失踪事件の捜査員だった。その為、小谷の説得は難しくなかった。ただ警察庁に対する報告は微妙なものがあった。
竹山達は、県警の官舎で身を潜めていたが、１６時には機動隊の車で雨屋に入った。
１６時１０分。分部のタクシーが北側に現れた。パトカーが道を開き、ブロックとフェンスまで分部は入って来た。
分部は叫んだ。
「竹山ぁー。ガキの顔を見せてもらおう。１７時にガキが交差点に入らなかったら、母親の命はない。」
小谷がハンドマイクでネゴを始めた。
ー清美さんはここに来ている。まず、よしこさんを、こちらに渡して欲しいー
「ガキを交差点に入れろ！。交渉はそれからだ。」
立ち上がった清美を竹山が押さえた。
ー分部。ここに君のお姉さんが来てる。話しがしたいそうだ。ー
ハンドマイクを渡すノイズが響いた。
ー豊。やめなさい。こんな事が何になるの？。あなたは何で、姉ちゃんを苦しめた犯人と同じ事をするの？。ー
「逆に聞きたい。姉ちゃんを見捨てた警察に、なんで協力してる！。こいつらは市民の味方でも何でもない。自分達の組織が平穏無事なら、あとはどうだっていい連中だ。見ろ！。高いパトカー何台も使って、この俺を捕まえられない。証拠の書類を積み上げても、何も防げない。…俺はな！。こいつらの無能を世の中に教えてやるのさ

！。」
ー違うわ！。犯人は携帯に細工してたの。警察だと思って話してたのは犯人だったの。それに偽物の１１０番で、別の場所に刑事さんをおびき寄せてたの！。ー
「目に浮かぶぜ。その間抜け振りが！。」
ーやめなさい。刑事さん達は、何年もかかって犯人を捕まえてくれた。卑劣なのは、私達のスキにつけ込んでくる犯人なの。私達がスキを見せなければ、犯人は犯行を犯せない。あの時の私にも事件を防ぐチャンスはあったの。ー
「待てよ…。そんな理屈は被害者の言う事じゃないだろう。」
ーこの街は。国や県や市の物じゃないの。私達の物なの。その全てを丸投げして、うまく行く訳ないじゃない。私達も犯罪に対して何かすべきなの。犯行をさせない努力をねー
分部は大声で笑った。竹山にも、その論理は筋の通ったものだと思えた。しかし、それで納得する分部ではない事も、竹山は知っていた。
「姉ちゃんの理屈はわかった。好きにすれば良い。しかし、俺の理屈は違う！。…セレモニーは終わりだ。ガキを交差点に入れろ！。」
小谷のガッカリした背中が、くるりと回って言った。
「すいません、竹山さん。清美さんをお願いします。」
二人は機動隊の輸送車を降りた。暖冬とは言え、冬の空気は冷たかった。
竹山はフェンスを越えて、先に交差点に入った。三ツ矢が抱き上げた清美を、中で受け取った。
「あの人が入ったら…お別れだね。」
清美は小さな声で言った。
「いいか？。大切なのは、清美はもどり、あいつは刑務所に入る。それだけだ。」
分部はタクシーを離れた。父親の勝利が警官を振り払って、タクシーに駆け寄って行った。小谷の顔から血の気が引いた。

「分部！。清美さんは交差点に入った！。その人に手を出すな！。」
分部はフェンスによじ登りながら、振り返った。
「両親が居りゃあ、ガキのパワーも上がるってもんさ。」
タクシーの中から、妻を救い出した勝利が交差点の中を見た。動かないはずの口から、言葉が洩れた。
「キ…ヨミ…キヨ…ミ…。」
連呼する勝利に、よしこは勝利に寄りかかりながら立ち上がった。
「あなた…清美なの？。ねー清美なの？。」
「ソダ。キヨミダ。モドテキタ。キヨミダ。」
二人は信じられないスピードで、フェンスに向かって突進し始めた。
分部は不気味に笑いながら、フェンスをまたぐ所だった。その残っていた左足に二人の手がかかった！。小谷の腕時計が１７時００分を示した。
交差点の中がボヤケ始める。分部は、自分の足に絡まってくる４本の手を、振りほどこうと暴れ始めた。しかし、振りほどくどころか、二人の老人は分部につかまって、フェンスを越えようとしていた。
分部に二人がのしかかり始めた。
勝利の不自由なはずの左手が、分部の持っていたノートをつかんだ。
慌てた分部が、ノートの手を引き剥がそうとして、力を入れるとスッポリ抜けた。その反動で、ノートは分部の手を離れ、清美が手を伸ばした右手に入った。
すでに雨屋は、クッキリとその姿を見せていた。
「行くんだ！。清美。奴が動けないうちに！。」
「うん…でも、私…行きたくない。とおるちゃんを一人にできない。」
「いまさら…俺は大丈夫だ。お前との思い出で充分生きて行ける。」
「思い出なんて…思い出なんていらない。私はチクザンとの明日が欲しい。」
「お前の世界のとおるちゃんと明日を生きるんだ！。奴には清美が必要だ！。清美にもとおるちゃんが必要だ！。ほら…この先で待っ

てる。とおるちゃんが。中学校に居るはずだ。先生に助けを求めに行ってる。」
「うん。」
清美は、竹山の手から離れて、雨屋に近寄った。
離したくなかった…できれば。そんな気持ちを、二人の老人を振り払った分部がぶち壊しにした。
「じゃまするんじゃねーたぁけやぁまぁー。」
ナイフが向かってきた。スッと体を落として、ナイフの軌道から体を外した。
しかし。それはフェイントだった。体を落として、移動出来なくなった竹山を見て、分部は雨屋に向かって走った。
「しまった！。」
同時にその場にいた全員が叫んだ。
「ふっ。はっはっはっはっ。じゃな！。ガキはたっぷり、楽しませてもらうぜ！。」
絶望に叩きのめされた竹山は雨屋に行こうとした。三ツ矢と小谷が後ろからタックルして竹山を止めた。
「とめるな！。清美を渡してたまるかよ！」
「竹山さん。行ったら戻れなくなる！。」
小谷の声に竹山は、その場で崩れ落ちた。

ー第１０話小谷刑事ー
に望みをつなげ！

ー第１０話　小谷刑事

ー第１０話小谷刑事

なすすべもない竹山の耳に、懐かしい声が響いてきた。
「分部。そこまでだ。」
顔を挙げた竹山の目には、信じられない光景が展がっていた。雨屋を囲むように、背広を着た男達が建物の影から湧き出てきた。真ん中に小谷刑事がいた。シワもなく白髪でもない小谷刑事が…。
「なんだ?。おめえは?。」
「岐阜県警捜査一係小谷だ。分部　豊、未成年者略取及び、婦女暴行の現行犯で逮捕する。」
「そんなわけねえ…お前に捕まえられる訳ねえ!。」
雨屋の扉近くにいた清美に、分部は素早く目を走らせた。
カーゴパンツの太ももにあるポケットからナイフを抜いて、若き小谷刑事に襲いかかった。しかし若き小谷刑事は、カミソリのような動きで、振り出されてくるナイフを握った手を押さえてひねると、ナイフはポロリと地面に落ちた。
そのまま背中に持ってゆき、もう一方の手とあっと言う間に手錠を掛けた。
「言いたい事は、署で聞こう。」
そう言った若き小谷刑事は竹山や息子の小谷刑事、かつての後輩達の方を見た。
「父さん!わかりますか…利治です。」

若き小谷刑事は、ウン?。とゆう顔になった。
「利治。お前は刑事になったのか?。」
「はい。父さんに謝りたい事があります。父さんが犯人は未来から来たと言った時…信じませんでした。で…ひどい事を言いました。頭がおかしいんじゃないかって。ごめんなさい。謝りたかったけど…父さん死んじゃって。」
小谷利治は泣き崩れた。しかし父は冷静に言った。
「なるほど…未来はそんな感じか。いいんだ。刑事はまず疑え。そして何故そんな筋の通らない話になるのか考えろ。そうすると正しい道筋が浮かび上がってくる。その裏を取って行けば、真実を自然と受け入れられる。こういう犯人も逮捕できるという訳だ。」

「小谷さん。すいません、自分も信じませんでした。」
県警本部長が言った。
「田島か?。えらく老けてるな…。ホシを追い込んでくれて感謝する。お前には公私共に助けてもらってるが…未来のお前も俺を助けてくれるとはな…この道路封鎖たいへんだっただろう?。よくやれたな、こっちこそすまん。」
若き小谷刑事は全員をもう一度眺めた。
「驚いたな。こっちに居る刑事が全員、向こうにいるぞ。まぁいい。」
少し間を置いて、小谷刑事は言った。
「捜査協力に感謝する!。敬礼!。」
向こうの刑事と、こちらの刑事が、同時に敬礼した。
そして、その姿がボヤケ始めた。モワッとした声で、トオルチャンと何度も叫ぶ声が、竹山の耳に聞こえてきた。竹山はボヤケてゆく雨屋に向かって、立ち上がった。
「清美、戻ってこい。戻ってこい。戻ってこいよー。」
ハジメが、その背中に手を回した。

雨屋は完全にボヤケ、クッキリし始めると交差点が戻ってきた。
「行ったな…。これでいいのか？とおる。」
「いいさ。いいんだ。あいつを愛する資格は、チクザンにはない。」
「そんな事ないよ。強がるな。」
竹山は、この同級生の優しさが身にしみた。もはや、週刊誌の記者に戻れない自分を感じていた。
竹山は、隣りに座っている小谷刑事に気付いた。
「小谷さん。おやじさんはすごいですね。まさか、過去と未来両方から追い詰めて、捕まえるなんて…。」
「おやじはね。清美さんの事で、ひどい事言われてたんですよ。役立たずだって…後から知ったんですけど。でも、潰れないで、とうとう捕まえた。息子に頭おかしいって言われても、時には頭がおかしくなるのも刑事には必要だって…。」
警察は引き上げ始めた。
人気のなくなった交差点に、竹山と小谷刑事、三ツ矢。そして清美の両親が、帰る事が出来ずに残っていた。
全ては終わったかに見えた。しかし、まだ終わっていなかった。

ー第１１話君は戻ってきたにつづく！

ー第１１話　君は戻ってきた

ー第１１話君は戻ってきた

竹山は、戻ってきた交差点が奇妙な事に気づいた。
グルリと囲んでいるはずのフェンスが、雨屋が消えた部分だけ無いのだ。
ハジメも小谷も三ツ矢も、そして清美の両親も、竹山の持っているノートが光りを放っている事に気づいた。清美がタクシーで奪い返した、この世界のノートだ。
見ると。進学塾の方から、ベージュのコートを着た女性が、ヒールの音をさせながら歩いてきた。その後方にスーツを着た自分が見えた。
竹山はその女性を見た。年齢を重ねた顔は、それでも美しかった。
「とおるちゃん。ごめんなさい…戻りたかったけど、穴が開かなかったの。３０年間通ったの…やっと開いたの。ごめんなさい。」
竹山は、茫然として言葉を失った。
「…おばさんになっちゃったから、わからない？。」
「清美か？。年はいくつだ？。」
「４５になった…同い年でしょ？。」
「今。１５の清美が帰って行った…。」
「１５の私が？。」
「あぁ…さすがに若すぎて。でも、同い年の方がいい。」
「ありがとう…うれしい。」
「向こうのとおるちゃんは、なんだか渋いな…」

後ろの方に立っているスーツの自分を見た。
「そう。ずっと優しくしてもらって…でも帰るべきだって。毎年一緒に、ここに来てくれてたの。去年ね！直木賞とったの！。すごいでしょ！。」
「そりゃすごい。俺は週刊誌のゴシップ記者だ。でも…なんだか勇気が湧いてきたよ。」
「ふ～ん…でも、竹山　透のゴシップ記事って、ある意味すごい。」
「ありがと。人気はあるんだぜ。」
「でしょうね。竹山　透だもん。」
竹山はスーツの自分に呼びかけた。
「穴が閉じても、帰らないで！。お前の世界の清美も、帰ってくるから！」
スーツの自分は、右手を振って応えてきた。ビックリしたように、清美が言った。
「それは、本当なの？。」
「本当だよ。１５の清美が戻って、４５の清美も戻った。…だから戻るよ全部。」
清美は、口に手を当てた。両目から涙が溢れ出した。
「変わらないな。」
「なに？」
「１５の清美も、４５の清美も。」
「そう？。」
スーツの自分がボヤケ始めた。そのボヤケた中に、もうひとりの清美が、スーツの自分に駆け寄り、抱きつくのが見えた。そして、交差点の欠けたフェンスが戻ってきた。
清美は、１５の時と同じ顔で言った。
「お嫁さんにしてくれる…とおるちゃん。」
「俺。小説家じゃないんだけど？。」
「そんなの…気にしなくてもいい。」
「いや…。約束だから、小説家になるよ。」

「とおるちゃんが、そうしたいなら。なって！。」
「その前に、お父さんとお母さんを抱きしめてやれよ。…俺は、そのあとでいい。」
「うん。」
清美は涙をぬぐって、老夫婦に駆け寄って行った。

ーエピローグ

平井七丁目第四アパート3ー7号室

「で？。とおる君と清美はどうするの？」
ユウは、岐阜からヘトヘトになって戻って来た、ハジメに聞いた。
「清美の実家が、空き家になってるじゃん。清美の両親老人ホームから引き取って、住むんだって。」
「とおる君も？。」
「あいつ、業界じゃあ大物だから…すぐにって訳にはいかないよ。」
「でも、岐阜に戻るんならさ、仕事どうすんの？。」
「フリーのノンフィクションライターになるって。スポーツ誌の編集長から、ずっと誘いがあったらしい。けど…妄想のチクザンで人気があるし、週刊誌業界が奴を手離すとも思えない…どうすんのかな…。」
「…フリーなら、パソコンで飛ばせば、岐阜でも仕事できるよね。式とかはやるの？。」
「秋くらいに落ち着いたら、こじんまりとやるらしい。」
長女の直が、ハジメの所に走ってきた。
「ねえねぇ、おとうさん。清美ねえちゃんは～今度いつくるの？。」

「清美ねえちゃん、秋くらいにお嫁さんになるんだって。その時、直も行くか？。」
「いくいく！。チクザンのおじちゃんの～お嫁さんになるの？。」
「そうだよ。」
「なおもお嫁さんで行くよ！。」
「それはちょっと無理だな～。まず幼稚園を卒業しないと、成れないんだ。」
「うん！。わかった。」
直は、弟と妹に新情報を告げる為に、駆け戻って行った。
「直、清美見てわかるかな？。急に大人になっちゃったから…。」
「わかるよ。清美は変わってなかった。ちょっと化粧がこくなっても、あのちっちゃな清美ねえちゃんだった。」
「あ～私も会いたくなっちゃったな～。…でも、向こうに行ってた清美は、ウチに来てるの？。つまり…向こうの私達に…。」
「行ってたって、行き来してたって。」
「不思議ね。その多次元なんとかっててのおかげね。」
「それはまぁ良いだろ。実際はもっと違うものかもしれないし…。清美が透を、透が清美を…想う気持ちが、何かに通じたんだ。それが神様だろうか仏様だろうか、何だっていいさ。お互い愛し合ってれば、これくらいの事…起こったって良いじゃないか。そう信じたい。俺は…。」
ユウは、やわらかなハジメの顔を見ながら、このロクな事のない世界に、ぽっかりと落ちた日溜まりのようだと思った。
「私も信じる。愛するって良いね。パパと結婚して良かった！。」
ユウはハジメに抱きついていった。
「疲れてるんだから…やめろよ。」
「いいじゃない～！。」
それを見て、直を先頭に三人の子供達も、ハジメに抱きついていった。
五人で転がりながら、当たり前の幸せな午後が過ぎていった。

そして。
まだ物語は続く。
何でもない日常を、竹山と清美は取り戻した。それは、この世界の誰もが普通に、日々の中で紡いでいる物語だ。それをここで語る事は不要だろう。
それを守る為に、二人の物語は続く。
竹山は週刊誌業界から離れる戦いを始めた。同時に小説の執筆活動も始めたが、出版される気配はない。
清美は、透ならやるだろうと思っていた。人生が続く限り、あの日の約束を果たすために。

ー後書きにつづく

ー後書き

ー後書き

ここまで読んで下さった読者さん。お疲れ様でした。クライムズクライシスの後書きで、切ないラブストーリーと予告してましたが、あんまり切なく無かったかな～と思ってます。むしろ多次元宇宙の仕掛けが、訳わかんないで終わってる読者さんが、殆どかな～と心配しています。作中では触れられてないんですが、各宇宙間の時間差はタイムスリップで生じているという、設定になってます。また、分かんない事が増えちゃいましたか？。そういう方は、エピローグのハジメのセリフに乗っちゃって下さい。お互いに愛し合っていれば、このぐらいの事は起こるんだって事で、お願いします。

ちなみに雨屋交差点は実在します。ですが、名前の由来は作者が考えたもので、現実のものではありません。よく通る交差点で、アメヤという名前が気に入っていて、使ってみたいと通る度に思ってました。

本作は恋愛というジャンルで、失ったものを取り戻してゆく姿を、竹山を通じて描きました。現実には一度失うと、取り戻しすのは容易ではありません。アメリカでは年間３万人の子供達が行方不明になるという話が、ニコラス　ケイジの８ミリという映画の中で描かれていました。日本でも、子供達を狙った卑劣な犯罪が頻発しているのは、読者さんもご存知の通りです。こいした犯罪によって、失われるものがどれだけ大きなものか…それも作中に描いてみました。

もはや犯罪者につけ込まれない…そんなライフスタイルを必要とする時代になってきているんだと思います。

主題は恋愛です。と言うと漠然としていますが、岡本太郎さんの言葉からモチーフをもらっています。女という文字の上に男と、岡本太郎さんが書いたものに対して

「あら。男が上なのねー。」

とコメントが出ます。すると岡本太郎さんは

「男は外に出て行って、世の中に対してノーと言わなければならない。同時に男は、女に支えてもらわなければ生きられない、哀しみを知らなければならない。」

と答えます。こうした関係は、現実の中では崩壊しつつあるように作者は感じています。女性も世の中に出て行って、ノーと言わなければならなくなったからだと思うからです。

両者がパートナーシップを守りながら、このロクでもない世の中に対してゆくモチベーションこそが恋愛だという考え方で、本作を描きました。恋愛という絆で結ばれたチーム程、最強なものはないでしょう。

何故か前作に続いて、刑事さんが出てきますが、危うく乗っ取られそうで、かなり抑えました。最初は竹山と分部の差しの勝負だったんですが、さすがに途中で無理になってきて、警察を投入せざるおえなくなったのが、本当の所です。ハジメとユウも、竹山が清美をアパートに放置しておくのは違うだろうと言う事で、登場させました。この一家は、かなりお気に入りで、楽しんで書きました。

作中で15の清美を見て、誰も驚かない訳ですが、年齢で変わってる方が受け入れにくいんじゃないかと考えて、すんなり受け入れる

という様に描きました。ここで読者さんが、ついて来てくれるかどうか勝負になってるわけですが…どうだったんでしょうか？。でも、後書きまで読んで下さってる、あなたは大丈夫だったみたいですね！。ありがとうございます。

次回作は、サラブレット２歳馬になってしまった主人公と女性騎手が、ダービー日本優駿に挑戦するという、競馬恋愛小説です。また半年くらいお待たせすると思いますが…御期待下さい！。

２００８年２月１３日

武上渓

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6308d/

君はあの日のまま戻ってきた

2010年10月11日04時47分発行